

鶏の翼切除に関する試験

岡山県養鶏試験場

1 育成時における翼切除の影響について はしがき

鶏の翼切除に関する試験が行われ、その結果初生雛の翼切除を行うと発育が良く産卵等に対しても有効であるという報告がある。そこで当场において餌付前に上膊骨の中央部より翼を切除した場合に雛の発育・飼料効率更に成鶏における産卵・飼料効率その他に及ぼす影響について試験調査して、先ず育成時における翼切除の影響について結果をとりまとめたので参考に供する。

試験方法

1. 供試雛並びに試験区分

供試雛は昭和 34 年 9 月 2 日発生、同年 9 月 4 日餌付のロックホーン（正交配）雌雛 100 羽を供用して、これを試験開始時に無作為的に 50 羽あて 2 区に分けて、9 週令より各区から平均体重に近い雛 20 羽を選定し第 1 表のとおり試験区を設けた。

第 1 表 試験区

区分	項目	羽数		備考
		試験開始時	9 週令	
対照区		50羽	20羽	
試験区		50羽	20羽	

2. 翼切除方法

切除方法は鋏を灼熱し、翼をひろげて上膊骨のほぼ中央部を出血しないように焼切り、切断部に他の雛がつかないように墨汁を塗布した。

切除時期は餌付 3 時間前に行ない、切除前後は暗

くして雛の安静に努めた。

3. 供用試料並びに給与方法

供用飼料の配合割合及び給与期間は第 2 表のとおりであって、供用飼料は乾燥粉餌として不断給与とし、砂礫も不断給与とした。8 週令までは緑餌・腐殖土・かきがらは給与せず、9 週令より緑餌を 1 日 1 羽あたり生重量で給与飼料の 1 / 3 量を給与し、腐殖土・かきがらは不断給与とした。

第 3 表 管 理

期 間	区分	収容バタリー	備 考
入 雛～ 10日令		初雛用バタリー	給 温
11日令～ 20日令		幼雛用バタリー	無給温
21日令～ 56日令		中雛用バタリー	〃
57日令～ 70日令		大雛用バタリー	〃 (屋外)
71日令～126日令		成鶏用単飼バタリー	〃 (〃)

4. 管 理

供試雛は第 3 表のとおりバタリーに收容し、管理した。

5. 試験期間

昭和 34 年 9 月 4 日より昭和 35 年 1 月 8 日までの 18 週間 (126 日間)

6. 調査及び測定

- (1) 体重は試験開始時 (入雛時) 及びその後 2 週間毎に各個体について測定した。
- (2) 飼料摂取量は 1 週間毎に測定した。

第 2 表 供用飼料配合割合 (%) 及び給与期間

品 目	配合割合 (%)														備考		
	黄色玉蜀黍	小麦	麩	脱脂大豆	魚粉	ルンサミル	炭酸カルシウム	食塩	第 2 燐カルシウム	ナイロカルバン	粉末肝油	ミネラル	抗生	ビタミン B 混合剤		粗蛋白質含有量	
餌付～ 4 週令	34.95	15.0	10.0	13.0	12.0	10.0	2.0	2.0	0.5	0.25	0.05	0.05	0.05	0.1	0.05	20.49	粗蛋白質含有量は当場の分析による 粗蛋白質含有量は計算による
5 週令～ 8 週令	39.95	15.0	12.0	10.0	9.0	8.0	3.0	2.0	0.5	0.25	0.05	0.05	0.05	0.1	0.05	18.72	
9 週令～ 15 週令	40.95	16.0	13.0	11.0	6.0	7.0	3.0	2.0	0.5	0.25	0.05	0.05	0.05	0.1	0.05	17.41	
16 週令～ 18 週令	43.95	15.0	15.0	12.0	4.0	4.0	3.0	2.0	0.5	0.25	0.05	0.05	0.05	0.1	0.05	15.32	

岡山畜産便り 1960.07

(3) 斃死雛は剖検の上死因を究明した。

第4表 体 重 (1羽平均体重単位 g)

区別	週令 餌付時	2	4	6	8	10	12	14	14	18	増体量	増体量 指数
対 照 区	37	124	284	508	757	978	1,162	1,342	1,515	1,691	1,654	100.0
試 験 区	36	124	280	487	719	967	1,120	1,272	1,417	1,565	1,529	92.5

試験成績及び考察

1. 体 重

体重の変化は第4表及び第1図のとおりであつて、増体重をみると、対照区が試験区に比較して1羽平均 124.4g 大きく、増体量指数で比較すると約7%の差であつた。

しかし対照区の翼の重量が体重の10%であることを考慮すると、試験区が対照区より約5%程度増体量が大であると考えられる。特に10週令においては好影響を及ぼしていることを示している。

2. 飼料摂取量

飼料摂取量は第5表及び第1図のとおりであつて、試験期間中の1羽平均飼料摂取量を比較すると、対照区が試験区より249.8g 多く、資料要求率においても0.24の差をもって好成績を示しているが、対照区の翼の重量が体重の約10%であることを考慮すると試験区が対照区より飼料要求率において若干優れているものと考えられる。

3. 育 成 率

育成状況は試験開始5日令に試験区において翼切除の影響と思われる衰弱雛(淘汰)1羽が発生し

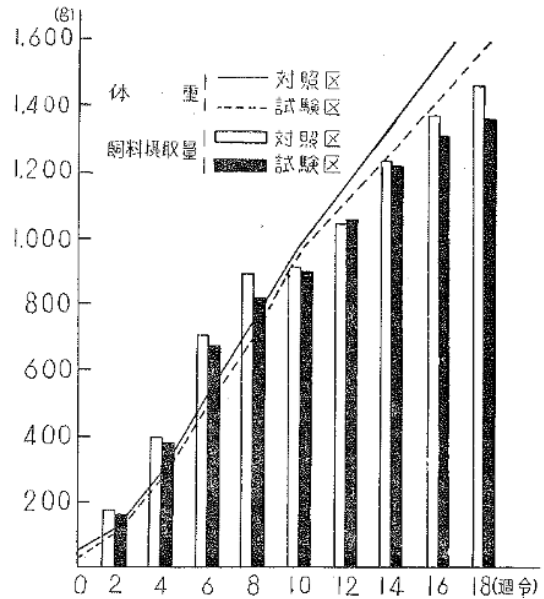
第5表 飼料摂取量 (1羽2週間平均 単位 g)

区別	週別	2	4	6	8	10	12	14
対 照 区		171	399	721	901	923	1,057	1,259
試 験 区		167	392	675	833	917	1,067	1,240

16	18	全期間1羽平均飼料摂取量	増体量	飼料要求率
1,387	1,464	8,281	1,654	5.01
1,352	1,387	8,031	1,529	5.25

(註) 飼料要求率 = $\frac{\text{飼料摂取量}}{\text{増体量}}$

第1図 増体状況並びに飼料摂取量



たのみでその他は大体健康で両区の間には特別な差は認められなかつた。

摘 要

餌付の翼切除が雛の増体量・飼料摂取量及び育成率におよぼす影響について比較検討する目的で、昭和34年9月4日餌付けのロックホーン(正交配)雌雛を供用し、昭和35年1月8日までの18週間にわたって試験調査を実施して次の結果を得た。

(1) 体重においては増体量は両区間に若干の差を生じ、対照区に比較して試験区が劣つた。しかし体重に対する翼の重量が約10%であることを考慮すると、翼の切除が若干影響を及ぼしたと考えられる。

(2) 飼料摂取量は両区間に若干の差があつたが、対照区の翼の重量を考慮した場合の飼料要求率は、試験区がやや優れていると考えられる。

(3) 育成率においては、試験区において翼切除による事故雛が1羽発生したのみで、その他特に差異は認められなかつた。

要約すると、以上のように翼切除による育成試験の成績より、以上のように翼切除による育成試験の成績により、両区間の増体量・飼料効率に若干の差異を生じたが、体重に対する翼の重量が約10%であることを考慮すると、翼切除が増体量・飼料効率に若干好影響を示す傾向が認められた。

(養鶏試験場速報より)